

筑波大学日本文学会会報

第33号

2009年2月

親愛なる芳賀先生（新保邦寛）	1
日本文学会だより	3
研究室だより	5
新刊紹介	9
卒業生だより	11
日本文学会教官学生名簿	14

親愛なる芳賀先生

新 保 邦 寛

もう二十年以上同僚としてお付き合いいただいた芳賀先生を、とうとうお送りする時が来た。その時は、ここ数年私にとって正に“二〇〇九年問題”としてあって、とにかく専攻や研究科に大きく貢献された方だから、最終講義をしていただき盛大にお送りするのが筋、と思っていた。冬の初め、これも自分の役目と言い聞かせ、お伺いを立てたところ、お答えは思いも寄らぬものであった。お断りになるかもしれないくらいのは察していたが、まさか「最近勉強していないから」とおっしゃるとは。

無論、そんなお言葉を真に受けた訳ではない。特に独立法人化以降の大学の激変、研究科や専攻の混迷をうけて、様々に奔走して来られたことを私なりに承知しているつもりだから、ショックだったのだ。いや、根はもつと深い、〈失われた十年〉と言われた頃、日本文学領域も危機に晒されていたと思う。創業者の先生方が次々去られ、何とかカール六世亡き後のハプスブルグ家宛らの状態でも言ったらいいか、領域の自律性を保つことさえままならなかった。将来を考えればどこやらに冊封されればいいということにはならない筈なのに、あるいは孤軍奮闘されていたのではなかったか。一切妥協せず、周囲を説き伏せ、領域の自律を貫くべく努めておられた。時には強引だったかもしれず、「俺は石もて追われるんだ」とよく冗談をおっしゃっていた。

大学の教員にとって研究と教育は車の両輪だ。ただ教授はもう一つ組織の運営を担う責任がある、それは仕方がない。しかし早くに教授になられた芳賀先生の場合、それに取られた割合が大きすぎた。先生は何より学究肌の人だが、一方で教育を大切にされた。教育の為に研究が犠牲になることを厭わない。その研究と教育を守るべく大学や研究科、専攻の運営のあり方を見過ごしにできない。結果的に一番大切なご自身の研究が一番後回しになる、正に典型的な全共闘世代の学者と言うべきか。そうした先生が、あの〈大学紛争〉にも劣らぬ変革と激動に、責任ある立場で際会することになったばかりか、領域の再編まで担わねばならなかった。「勉強していない」というお言葉にこめられているのは、つまりはそういう重い事情なのだ。

一番の厄介者は私だったかもしれない。足並みをそろえるのが苦手で、その行き先には更になじめず、芥川の〈王朝もの〉の主人公のようにあった私の、絶えず味方となって導いてくださった、同情ではなく領域の将来を思つてのことである。いずれ領域を担わねばならぬ私の為に、様々に尽力してくださった。それもこれも芳賀先生の研究者としての時間を削つてのことだった筈で、だからあのお言葉は辛い。しかし思えば、そこには、学問研究に対する熱く、厳しい思いがあふれている。「勉強していないから」やらないというお言葉は、裏を返せば厳しいメッセージになる。芳賀先生が、筑波の日本文学に残されたメッセージとして大切にしたいと思う。

それにしても、筑波に來られて何年かかの芳賀先生は過激だった。上にも我々にも容赦のない態度を取っておられた。ある先任教授の学位に係わった折、領域外のしかも年下の審査員であつたにも拘らず、ご自身の学問的信念を曲げず最後まで反対された。厳しい外圧にも屈しなかった。私はあの頃の芳賀先生が一番好きだ、一番〈へらしい〉と思うからだ。大学も研究科もまた、あの頃すばらしかったのだ、何よりも見識とか良識とかがまかり通つていたように思う。それ故芳賀先生も、ある意味で安心して暴れたのかもしれない。人の本質はそう変わるものではないから、もし大学がこうも無原則な状態に陥らなかつたら、今でもやんちゃでおられたに違いない。この人がいい年をしてやんちゃに振舞つておられる姿を想像すると愉快でならない。もしかすると先生はそんなふうであられる大学、日本文学の未来を願つて、領域の運営や人事を進めてこられたのかもしれない。となると、後を引き継ぐ身にとっては重い話にならざるを得ないが、これはいろいろ噛み締めねばならぬことがありそうだ。

ともあれ、今は、重い重い歳月を歩いてこられたことに、心より敬意を表したく、「芳賀先生、ご苦労様でした。」